# HTLV-I associated uveitis の疫学と臨床に関する多施設共同研究

孟2), 山本 正洋2), 大島 健司3), 林 中尾久美子1),大庭 紀雄1), 猪俣 忍4),伊比 健児4),望月 學5), 吉村 浩一5), 池田 英子5), 中塚 和夫6) 秋谷 小野ひろみ6)、大野 嶋田 英一7, 岡村 良一8, 稲田晃一朗8, 澤田 新治7), 哲司10), 臼井 正彦11), 上原 麗子11), 大野 二見 要介9,長瀧 重智10), 荻堂 石岡みさき12), 鍵谷 一成13), 園田 俊郎14), 屋敷 伸治14), 田島 雅彦12), 山口

HTLV-I associated uveitis(HAU)の疫学的および臨床的特徴を明らかにするために、多施設参加による患者一対照研究を行った。1992年9月~1993年1月の5か月間に受診した内因性ぶどう膜炎 426 例を対象とした。約半数はベーチェット病、サルコイドーシス、原田病を主体とする既知のぶどう膜炎で、残りは分類不能のいわゆる原因不明のぶどう膜炎であった。「原因不明ぶどう膜炎群」においては、血清抗 HTLV-I 抗体の陽性率は「既知ぶどう膜炎群」や対照群と比べて有意に高く、HTLV-I 感染が関連して発症している HAU の存在を示唆した。また、「原因不明ぶどう膜炎群」の血清抗 HTLV-I 抗体価は、「既知ぶどう膜炎群」や対照群における陽性者のそれと比べて有意に高かった。HAU の臨床的特徴を明らかにするために、「原因不明ぶどう膜炎群」の中の血清抗HTLV-I 抗体陽性50 例をHAUと仮定して分析したと

約

ころ,以下の事項が判明した.①中年の健康な成人の片眼あるいは両眼に急性ぶどう膜炎で発症し、霧視や飛蚊症を来す.②活動期には、硝子体混濁を伴う肉芽腫性あるいは非肉芽腫性の前部ぶどう膜炎徴候や、網膜血管炎所見をみる.網脈絡膜の渗出性病変は少ない.③局所的あるいは全身的な副腎皮質ステロイド薬に反応して寛解する.④視力の転帰は一般に良好である.⑤再発することが少なくない.⑥HTLV-I associated myelopathy などHTLV-I 関連症候群に合併することもあるが、眼以外には無症候性のことが多い.ただし、甲状腺機能亢進症が併発することがある.(日眼会誌 98:858—865,1994)

キーワード:HTLV-I, ぶどう膜炎, 疫学, 臨床像, 抗 HTLV-I 抗体価

# A Multicenter Clinico-Epidemiological Study of HTLV-I Associated Uveitis

Kumiko Nakao<sup>1)</sup>, Norio Ohba<sup>1)</sup>, Hajime Inomata<sup>2)</sup>, Masahiro Yamamoto<sup>2)</sup>, Kenji Ohshima<sup>3)</sup>, Hideyuki Hayashi<sup>3)</sup>, Shinobu Akiya<sup>4)</sup>, Kenji Ibi<sup>4)</sup>, Manabu Mochizuki<sup>5)</sup>, Koichi Yoshimura<sup>5)</sup>, Eiko Ikeda<sup>5)</sup>, Kazuo Nakatsuka<sup>6)</sup>, Hiromi Ono<sup>6)</sup>, Shinji Oono<sup>7)</sup>, Eiichi Shimada<sup>7)</sup>, Ryoichi Okamura<sup>8)</sup>, Koichiro Inada<sup>8)</sup>, Atsushi Sawada<sup>9)</sup>, Yousuke Futami<sup>9)</sup>, Shigetoshi Nagataki<sup>10)</sup>, Tetsushi Ogidou<sup>10)</sup>, Masahiko Usui<sup>11)</sup>, Reiko Uehara<sup>11)</sup>, Shigeaki Ohno<sup>12)</sup>, Misaki Ishioka<sup>12)</sup>, Masahiko Kagiya<sup>12)</sup>, Kazunari Yamaguchi<sup>13)</sup>, Shunro Sonoda<sup>14)</sup>, Shinji Yashiki<sup>14)</sup> and Kazuo Tajima<sup>15)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Ophthalmology, Kagoshima University Faculty of Medicine, <sup>2)</sup>Department of Ophthalmology, Kyushu University Faculty of Medicine, <sup>3)</sup>Department of Ophthalmology, Fukuoka University School of Medicine, <sup>4)</sup>Department of Ophthalmology, University of Occupational and Environmental Health, <sup>5)</sup>Department of Ophthalmology, Kurume University School of Medicine, <sup>6)</sup>Department of Ophthalmology, Oita Medical University, <sup>7)</sup>Department of Ophthalmology, Saga Medical School, <sup>8)</sup>Department of Ophthalmology, Kumamoto University School of Medicine, <sup>9)</sup>Department of Ophthalmology, Miyazaki Medical College, <sup>10)</sup>Department of Ophthalmology, Ryukyu University School of Medicine, <sup>11)</sup>Department of Ophthalmology, Tokyo Medical College, <sup>12)</sup>Department of Ophthalmology, Yokohama City University School of Medicine, <sup>13)</sup>Blood Transfusion Service, Kumamoto University School of Medicine, <sup>14)</sup>Department of Virology, Kagoshima University Faculty of Medicine, <sup>15)</sup>Division of Epidemiology, Aichi Cancer Center Research Institute

別刷請求先:890 鹿児島県鹿児島市桜ケ丘 8-35-1 鹿児島大学医学部眼科学教室 中尾久美子 (平成 6 年 1 月 25 日受付,平成 6 年 4 月 19 日改訂受理)

Reprint requests to: Kumiko Nakao, M.D. Department of Ophthalmology, Kagoshima University Faculty of Medicine. 8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima-shi, Kagoshima-ken 890, Japan (Received January 25, 1994 and accepted in revised form April 19, 1994)

#### Abstract

To elucidate the clinical and epidemiologic features of HTLV-I associated uveitis (HAU), a multicenter case-control study was performed by collaboration of university hospitals throughout Kyushu and Okinawa and two university hospitals in the central metropolitan area. A total of 426 cases of endogenous uveitis were collected and studied between September 1992 and January 1993; about half of the cases were definable for etiology or clinical entity, and the remaining cases were unknown. Assesment of the serum antibodies to HTLV-I revealed that the group of entity-undefined uveitis had a significantly high prevalence of HTLV-I as compared with the age-and sex-matched control subjects, giving supportive evidence for HAU. The titer of serum HTLV-I antibodies was significantly higher in entity-undefined uveitis than in HTLV-carriers. Assuming that a collection of 50 cases of HTLV-I seropositive, etiology-undefined

uveitis represents HAU, its clinical features consisted were: ① middle-aged, otherwise healthy adults developed acute inflammatory uveal disease and presented with visual haze and/or floaters; ② the disease showed granulomatous or nongranulomatous anterior uveal reactions accompanied by vitreous opacities and retinal vasculitis; ③ the lesions resolved in response to topical or systemic corticosteroids; ④ the visual outcome was usually favorable; ⑤ nearly half of the cases had recurrent disease; ⑥ the cases remained systemically unremarkable, except for two cases of HTLV-I associated myelopathy and eight cases of hyper thyroid disease. (J Jpn Ophthalmol Soc 98:858—865, 1994)

Key words: HTLV-I, HTLV-I associated uveitis, Epidemiology, Clinical feature, Anti-HTLV-I antibody titer

### I 緒 言

Human T-cell lymphotropic virus type 1 (HTLV-I) は,成人T細胞白血病やHTLV-I associated myelopathy の原因として関連するレトロウイルスであること が明らかにされている。HTLV-Iの感染は全世界に特異 な分布で広がっており、HTLV-I 抗体陽性者(キャリア) の多い地域にはこれらの疾病が集積している。 日本の南 西部は浸淫地域の一つである1)2)。HTLV-I 感染は眼科的 にも注目され、HTLV-I associated myelopathy の眼症 状として網膜血管炎, ぶどう膜炎, 網脈絡膜変性などの 報告がある3)~6)。さらに,原因不明もしくは既知の臨床単 位疾患を特定できないぶどう膜炎症例での HTLV-I 感 染率が有意に高いことから、HTLV-Iが関連して発症す るとみなされる HTLV-I associated uveitis (HAU) が 示唆されている4)7)~10)。平成2年度に結成された文部省 がん特別研究「HTLV-I 眼症に関する総合的研究」検討 班は、HAU の問題を中心課題として多施設共同研究を 行った. HAU の疫学的および臨床的特徴をかなり明確 にする結果を得たので報告する。

## II 対象と方法

九州・沖繩地区の大学病院眼科 7 施設および首都圏の大学病院眼科 2 施設が参加して、患者一対照調査を行った。1992 年 8 月に、各施設の担当者が鹿児島に集まって、ぶどう膜炎の診断基準を含む調査研究計画を協議策定した。調査期間は、1992 年 9 月 1 日~1993 年 1 月 31 日までの 5 か月間とした。この期間に受診した内因性ぶどう膜炎患者(再診を含む)のうち、採血に同意の得られた

症例を検索対象とし、ヘパリン採血して HTLV-I 感染の 有無を調べるとともに、ぶどう膜炎の臨床所見を一定の 調査票に記録した。

調査票には,対象患者の性,年齢,出身地,全身的既 往と眼科的既往, ぶどう膜炎の診断名, 視力, 細隙灯顕 微鏡検査・眼底検査・螢光眼底造影検査の結果, 治療, 経過が記入された。これらの臨床所見は、調査期間中の 所見だけでなく過去のすべてを記録した。 ぶどう膜炎の 診断は,一定の診断基準のもとに各施設で行った。特に HAUと臨床像が似ているサルコイドーシスに関して は、組織学的診断がついているものや、眼症状の他に肺 門リンパ節腫大を伴うもの,あるいはツベルクリン反応 陰性, 血清アンギオテンシン転換酵素の上昇, 血清リゾ チームの上昇,リンパ節や肺への67Gaの集積がみられる ものをサルコイドーシスによるぶどう膜炎と診断し、眼 症状のみからサルコイドーシスが疑われても、その他の 全身所見がないぶどう膜炎は原因不明のぶどう膜炎とし た. 調査票は鹿児島大学において集計分析した. 主とし て, 抗 HTLV-I 抗体陽性の原因不明のぶどう膜炎, 抗 HTLV-I 抗体陰性の原因不明のぶどう膜炎, さまざまな 既知疾病によるぶどう膜炎の臨床所見を x<sup>2</sup>検定を用い て比較した.

採取された血液は鹿児島大学に集めて細胞成分と血漿に分離し、血漿の抗 HTLV-I 抗体を熊本大学附属病院輸血部で測定した。抗 HTLV-I 抗体はゼラチン粒子凝集法(PA法)と enzyme linked immunosolbent assey(ELISA法)とで測定し、二つの結果が一致しなかった場合は western blot 法を追加した。

各施設を調査期間に受診したぶどう膜炎以外の外来患

表1 ぶどう膜炎の内訳

						施	設1)				
		I	II	Ш	IV	V	VI	VII	VIII	IX	計
1.	既知ぶどう膜炎	23	72	25	14	39	28	14	9	8	232
	ベーチェット病	10	30	10	2	16	7	6	3	2	87
	サルコイドーシス	4	22	7	2	8	8	1	4	2	58
	原田病	5	12	7	4	10	6	5	0	2	51
	その他	4	8	1	6	5	7	2	2	1	36
2.	原因不明ぶどう膜炎	30	50	20	10	32	19	10	7	16	194
	<b>#</b>	53	122	45	24	71	47	28	16	24	426

1) I: 産業医科大学附属病院眼科,

II: 久留米大学医学部附属病院眼科,

III:大分医科大学附属病院眼科,

IV: 佐賀医科大学附属病院眼科,

V:熊本大学医学部附属病院眼科, VII:琉球大学医学部附属病院眼科, VIII:東京医科大学附属病院眼科,

VI: 鹿児島大学医学部附属病院眼科,

IX:横浜市立大学医学部附属病院眼科

表 2 対照群,既知ぶどう膜炎群および原因不明ぶどう膜炎群における HTLV-I 感染率

CL	患者対照群2)	患者対照群²) 献血者対照群³)		「既知ぶどう膜炎群」			「原因不明ぶどう膜炎群」				
施設1)	HTLV-I 感染率(%)	HTLV-I 感染率(%)	HTLV-I 感染率(%)	OR 14)	OR 2 <sup>5)</sup>	100	HTLV-I 感染率(%)	OR 14 (95%信頼区間)	OR 251 (95%信頼区間)		
I	3/55(5.5)	1,074/65,205(1.6)	1/ 23( 4.3)	0.79	2.71	1/	30(3.3%)	0.60	2.06		
II	5/125(4.0)	270/ 18,022(1.5)	2/ 72( 2.8)	0.69	1.88	16/	50(32.0%)##7)	11.29**8)(4.49~28.42)	30.94**8)(20.95~ 45.69)		
III	5/ 50(10.0)6)	2,046/ 97,905(2.1)	0/ 25( 0.0)	0.00	0.00	0/	20(0.0%)	0.00	0.00		
IV	1/ 20(5.0)	1,427/56,783(2.5)	2/ 14(14.3)	3.17	6.47	3/	10(30.0%)	8.14	16.63**( 6.16~ 44.88)		
V	1/ 25( 4.0)	3,832/168,325(2.3)	1/39(2.6)	0.63	1.13	12/	32(37.5%)#	14.40**(2.51~82.68)	25.76**(15.98~ 41.51)		
VI	5/48(10.4)	7,366/143,222(5.1)	2/ 28( 7.1)	0.66	1.42	11/	19(57.9%)##	11.83**(3.64~38.42)	25.36**(13.79~ 46.63)		
VII	0/24(0.0)	3,160/75,034(4.2)	0/ 14( 0.0)		0.00	4/	10(40.0%)#	over 1 V.1111 99	15.16**( 5.89~ 39.06)		
VIII	0/165(0.0)	1,030/197,803(0.5)	0/ 9(0.0)	-	0.00	1/	7(14.3%)	The Past Hill	31.84* ( 8.33~121.74)		
IX	0/ 25( 0.0)	1,133/172,150(0.7)	0/ 8( 0.0)	-	0.00	2/	16(12.5%)	OFFICE CASES	21.56**( 7.71~ 60.30)		
計	20/388(5.2)	21,338/994,449(2.1)	8/232(3.4)	0.66	1.62	50/	194(25.8%)##	6.39**(3.86~10.58)	15.83**(12.47~ 20.10)		

- 1) 表1と同じ施設を示す。
- 2) ぶどう膜炎対象患者と性・年齢をマッチさせて選んだぶどう膜炎以外の患者
- 3) 各施設の所在地における赤十字血液センターの献血者
- 4) OR1: 患者対照群をもとにしたオッヅ比 5) OR2: 献血者対照群をもとにしたオッヅ比
- 6) χ<sup>2</sup>検定で献血者対照の感染率と比較して有意差あり(P<0.01)
- 7)  $\chi^2$ 検定で対照患者群の感染率と比較して有意差あり(#:P<0.05, ##:P<0.01)
- 8) \*: P<0.05 で有意, \*\*: P<0.01 で有意

者から、ぶどう膜炎対象患者と性と年齢(±5歳)とが 一致した患者を患者対照として選び採血した。分離した 血清の抗 HTLV-I 抗体を上記と同様の方法で測定し, 患 者対照群における HTLV-I 感染率を求めた。なお,血液 の採取にあたっては、調査研究の目的を説明して協力を 求め、同意を得た。

また, 別の対照として, 福岡県赤十字血液センター前 田義章所長から提供された, 当該施設所在地の赤十字血 液センターが把握している献血者の HTLV-I 感染率に 関する平成4年度資料を使用した.

### III 結

#### 1. ぶどう膜炎の内訳

調査期間中に九州・沖繩地区7大学病院眼科と首都圏 2大学病院眼科を受診し、調査対象になった内因性ぶど う膜炎は 426 例であった。このうち, 232 例 (54.5%) は 既知のぶどう膜炎(「既知ぶどう膜炎群」)に分類された。 「既知ぶどう膜炎群」の80%以上はベーチェット病,原 田病, サルコイドーシスの3疾患が占めた。その他には, HLA B 27 陽性急性前部ぶどう膜炎, 桐沢型ぶどう膜炎, トキソプラズマ症,帯状ヘルペス,ポスナーシュロスマ ン症候群, フックス虹彩異色性毛様体炎, 交感性眼炎, トキソカリアーシス, 真菌性, 梅毒性, 糖尿病性, シェー グレン症候群などがあった.

残りの194例(45.5%)は、いわゆる原因不明のぶど う膜炎(「原因不明ぶどう膜炎群」)であった。各施設ご とに内訳をみると,「原因不明ぶどう膜炎群」の占める割 合は35.7~66.7%であった(表1).

### 2. ぶどう膜炎の HTLV-I 感染率

血清抗 HTLV-I 抗体を, 426 例のぶどう膜炎患者と 388 例の患者対照とで調べた。表2~4に結果をまとめ た. 1 例を除いて PA 法と ELISA 法の結果は一致した.

表 3	性別	1- 7xt-	HTLA	V-I	感染率
160	コエカコ	V-0//-	1111	1	

	男 性	女 性	計
すべてのぶどう膜炎	22/175(12.6%)	36/251(14.3%)	58/426(13.6%)
ベーチェット病	2/ 63( 3.2%)	1/ 24( 4.2%)	3/ 87( 3.4%)
サルコイドーシス	0/ 3(0 %)	1/55(1.8%)	1/58(1.7%)
原田病	2/ 26( 7.7%)	1/25(4.0%)	3/51(5.9%)
その他	1/ 18( 5.5%)	0/ 18( 0 %)	1/ 36( 2.8%)
原因不明	17/64(26.6%)	33/130(25.4%)	50/194(25.8%)
患者対照群	4/152( 2.6%)	16/236(6.8%)	20/388(5.2%)

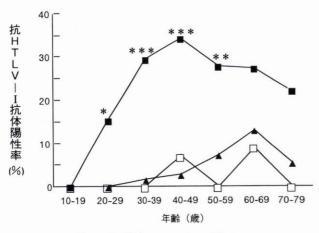


図1 年齢別のHTLV-I 感染率.

黒四角:原因不明ぶどう膜炎群 (n=194),白四角:既知ぶどう膜炎群 (n=232),黒三角:患者対照群 (n=388)。\*p<0.05,\*\*p<0.01,\*\*\*p<0.001

PA 法で陽性, ELISA 法で陰性を示した1例では, western blot 法により抗体の存在が確認された.

患者対照群 388 例中 20 例 (5.2%) が抗 HTLV-I 抗体 陽性であった。施設ごとにみると,  $0\sim10.4\%$ とかなり のばらつきがあるが,九州で高く,首都圏で低かった。 九州内でも,かなりのばらつきがあった。患者対照群の HTLV-I 感染率を施設所在地の赤十字血液センターに おける献血者(献血者対照群)のそれと比較すると, 1 施設を除いて有意差はなかった(表 2)。

ぶどう膜炎患者 426 例では,58 例 (13.6%) が抗HTLV-I 抗体陽性であり,患者対照群に比べ有意に高かった。「既知ぶどう膜炎群」と「原因不明ぶどう膜炎群」とに二分して,それぞれ患者対照群と比較した。「既知ぶどう膜炎群」では,232 例中8 例 (3.4%)と陽性率が低く,患者対照群と差異はなかった。この場合,疾患別にみても高い陽性率を示す既知疾患はなかった (表3)。

一方,「原因不明ぶどう膜炎群」では,194 例中 50 例 (25.8%) が陽性で,患者対照群に比べ有意に高かった。このことを施設ごとにみると,2 施設を除いて「原因不明ぶどう膜炎群」の陽性率は患者対照群より高く,九州・沖縄地区の4 施設で有意差をみた(表 2)。なお,首都圏でも,「原因不明ぶどう膜炎群」の中に陽性者を散見したが,大半は九州地区出身者であった。

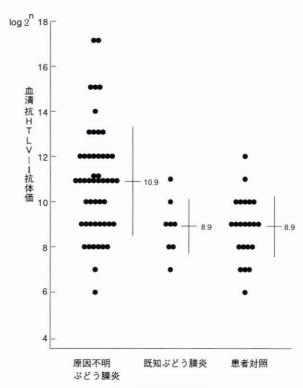


図 2 血清抗 HTLV-I 抗体価

原因不明ぶどう膜炎群 (n=50) は,既知ぶどう膜炎群 (n=8) および患者対照群 (n=22) と比較して血清 HTLV-I 抗体価は有意に高い(それぞれ p<0.05, p<0.01),横線は平均値,縦線は標準偏差を示す.

次に、ぶどう膜炎に対する HTLV-I 感染の相対危険度を、患者対照群および献血者対照群を対照としてオッヅ比から推定した。結果を表 2 に示す。「原因不明ぶどう膜炎群」に対る HTLV-I 感染のオッヅ比は、患者対照群を対照とした場合 6.39、献血者対照群を対照とした場合 15.83で、いずれも有意に高かった。これを施設ごとにみると、患者対照群を対照とした場合には 3 施設で、献血者対照群を対照とした場合には 7 施設で、それぞれ有意に高かった。一方、「既知ぶどう膜炎群」に対する HTLV-I 感染のオッヅ比はいずれを対照とした場合も低く、施設ごとにみても同様であった。

ぶどう膜炎患者の年齢と HTLV-I 感染率との関係を調べてみると,図1に示すように,「原因不明ぶどう膜炎群」では20~50代における感染率が患者対照群よりも有

表 4 ぶどう膜炎の臨床像

		原因不明		(iii		EE to de	
	1 10 10	HTLV-I(+)	HTLV-I(-)	_ ~	ーチェット病	サルコイドーシス	原田病
症例数	67 L	50	144	REAL	87	58	51
年齢(歳) 平均		50.4	47.5		42.6	52.8	45.6
範囲		22-79	12-79		17-69	18-76	22-72
性(男:女)		17:33	46:98		63:24	3:55	26:25
患眼 片眼性		53.1%	46.5%		9.5%	5.5%	3.9%
両眼性		46.9%	53.5%		90.5%	94.5%	96.1%
初発症状 霧視		69.4%	68.3%		89.4%	71.9%	86.3%
飛蚊症		42.9%	15.5%		23.5%	21.1%	5.9%
充血		6.1%	26.1%		23.5%	15.8%	15.7%
炎症部位		0.170	20.170		20.070	10.070	10.170
前部ぶどう膜炎		34.7%	48.2%		15.5%	19.0%	4.0%
後部ぶどう膜炎		6.1%	4.4%		5.9%	3.4%	14.0%
汎ぶどう膜炎		59.2%	47.4%		78.6%	77.6%	82.0%
炎症所見 炎症所見		33.4/0	41.4/0		10.0/0	11.070	04.070
毛様充血		42.9%	45.5%		58.3%	27.6%	36.7%
前房混濁		91.8%	93.8%		93.0%	96.6%	86.0%
前房フレア		55.1%	72.2%		77.6%	69.0%	55.1%
角膜後面沈着		10 00/	10.00/		24.50/	00.10/	00 50/
微塵状		42.9%	49.3%		64.7%	30.4%	32.7%
豚脂様		44.9%	23.6%		7.1%	46.4%	22.4%
虹彩結節		26.5%	13.4%		2.4%	40.4%	22.9%
虹彩ルベオーシス		0 %	3.5%		14.0%	3.5%	2.0%
虹彩後癒着		18.8%	30.8%		38.8%	36.8%	34.0%
隅角結節		8.9%	8.3%		1.3%	41.1%	0 %
周辺虹彩前癒着		11.1%	19.7%		14.0%	42.9%	6.8%
眼圧上昇		29.8%	29.2%		33.7%	30.4%	19.1%
硝子体混濁		88.0%	65.5%		85.9%	91.2%	25.0%
微塵状		46.9%	30.2%		54.1%	35.1%	20.8%
顆粒状		34.7%	16.5%		20.0%	24.6%	4.2%
ひも状		22.4%	11.5%		12.9%	3.5%	2.1%
膜状		36.7%	18.7%		24.7%	19.3%	0 %
雪玉状		2.0%	8.6%		7.1%	40.4%	2.1%
眼底病変		43.8%	40.6%		84.5%	81.0%	96.0%
網膜血管炎		49.0%	35.3%		69.0%	56.9%	18.4%
網膜出血		12.5%	10.9%		54.8%	24.1%	2.0%
網膜滲出病巣		12.5%	22.5%		44.0%	25.9%	74.0%
網脈絡膜変性病巣		14.7%	8.7%		9.5%	10.3%	4.0%
視神経乳頭の変化		10.6%	19.1%		43.2%	17.5%	68.1%
治療 ステロイド局所		50.0%	69.2%		76.7%	44.8%	21.6%
ステロイド全身		12.5%	4.9%		0 %	6.9%	23.5%
ステロイド局所・	全身	37.5%	21.1%		4.7%	43.1%	51.0%
経過 完全寛解		39.6%	32.3%		24.7%	20.0%	61.2%
不完全寛解		60.4%	67.7%		75.3%	80.0%	38.8%
再発		41.3%	51.3%		88.9%	75.5%	52.1%

頻度(%)は、(該当症例数)/(項目記載のあった症例数)

意に高かった。「既知ぶどう膜炎群」では、年齢ごとにみても患者対照群と差はなかった。

性と HTLV-I 感染率との関係を調べてみた(表3). 患者対照群では男性 2.6%,女性 6.8%とやや後者が高いが,有意差はなかった. ぶどう膜炎患者でも性差はなかった.

## 3. 血清抗 HTLV-I 抗体価

抗 HTLV-I 抗体が陽性の血液試料について, その抗体価(PA価)を検討した結果を図 2 示す. 「原因不明ぶど

う膜炎群」の抗 HTLV-I 抗体価は 64~32,784 倍とかなり幅があった。これを「既知ぶどう膜炎群」や患者対照群と比較すると、いずれの場合も有意に高かった。

### 4. HTLV-I associated uveitis の臨床像

「原因不明ぶどう膜炎群」の中で抗 HTLV-I 抗体陽性 であった 50 例を HAU とみなして、その臨床像を HTLV-I 抗体陰性の「原因不明ぶどう膜炎」(以下、 HTLV-I(-) 群)、ベーチェット病、サルコイドーシス、原田病のそれと比較した。調査票をもとに各疾患の臨床

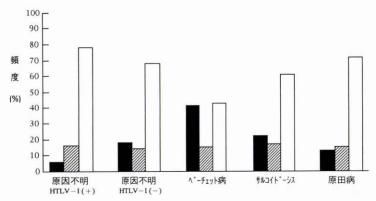


図3 調査期間終了時のぶどう膜炎の疾患別矯正視力.

原因不明ぶどう膜炎,HTLV-I(+):50 例,原因不明ぶどう膜炎,HTLV-I(-):144 例,ベーチェット病:79 例,サルコイドーシス:41 例,原田病:46 例。黒コラム:視力 0.1 未満,斜線コラム:視力 0.1 以上 0.4 以下,白コラム:視力 0.5 以上

所見の出現頻度(%)をまとめた結果を表4に示す。

以下には、主として HAU と仮定した 50 例の臨床像 を、他のぶどう膜炎と比較しながら記述する.

### 1) 性, 年齢

男性 17 例,女性 33 例で女性にやや多かった。受診時の年齢は、平均 50.4 歳 (22~79 歳) であった。年齢と性比に HTLV-I (-) 群と差はなかった。

### 2) 症状, 徴候

受診時に訴える症状としては、他のぶどう膜炎に比べると飛蚊症を訴える症例が多かった.

罹患は,両眼性罹患が約半数であった.残りの半数は, 少なくとも調査期間中は片眼性であった.

炎症部位は前部ぶどう膜炎が 34.7%, 後部ぶどう膜炎 があるものが 65.3% であった。ベーチェット病,サルコイドーシス,原田病と比べると前部ぶどう膜炎が多かったが,HTLV-I(一) 群とは差はなかった。

細隙灯顕微鏡検査所見としては、次のものがあった. 軽度~中等度の毛様充血が約半数にあった。ほぼ全例に 軽度~中等度の前房細胞があり、約半数にフレアがあっ た。細かい角膜裏面沈着物や豚脂様角膜裏面沈着物が半 数に出現した。豚脂様角膜裏面沈着物は HTLV-I(一) 群に比べると有意に多く、サルコイドーシスと同じくら いの出現頻度であった。虹彩結節が 1/4 の症例にあり、 HTLV-I(一) 群に比べると多いが、サルコイドーシスと 比べると少なかった。

硝子体混濁が88%にあり、HTLV-I(一)群と比べると有意に多く出現した。さまざまな大きさ、形、濃度の硝子体混濁をみたが、顆粒状、ひも状、膜状の混濁が他の疾患と比べて多かった。雪玉状混濁は稀であった。

眼底検査では、約半数に白鞘や白点の付着などの網膜血管異常が後極部あるいは周辺部にあった。螢光眼底造影検査を施行した症例では、螢光色素の網膜血管からの軽度漏出や血管壁の染色をみる事例が少なくなかった。これらの網膜血管の変化は、HTLV-I(-)群に比べると

やや多く出現した。滲出性病変などの網膜脈絡膜自体の 炎症所見は,他のぶどう膜炎に比べると出現率が少な かった。螢光眼底造影検査で色素漏出,後期染色を呈す るような発赤・浮腫などの視神経乳頭の変化を10%の症 例にみた。

#### 3)経 逅

治療として、副腎皮質ステロイド薬の局所療法、全身療法あるいは併用が炎症所見の程度に合わせて施行された。約1/3の症例は後遺症なしに完全寛解した。残りの症例は、調査期間終了の時点では不完全寛解の状態であった。虹彩後癒着や硝子体混濁が残存し、軽度の視力低下や飛蚊症などの後遺症を残すこともあった。

視力の転帰は、HTLV-I(-)群、ベーチェット病、サルコイドーシス、原田病と比べると、一般に良好で、大半はほぼ正常の視力に回復した(図3).

経過観察期間は症例ごとにさまざまであったが、調査期間終了時までに 41.3% で,同一眼あるいは他眼にぶどう膜炎の再発をみた。再発率は,他のぶどう膜炎と比べるとやや低かった。

### 4) 全身合併症

さまざまな全身疾患の合併をみた。しかし、HTLV-I associated myelopathy を発症していた 2 例を除くと、大半は加齢変化あるいは HTLV-I とは関連しない疾患であった。ただし、甲状腺疾患についてみると、HTLV-I (一) 群 144 例中では 1 例に慢性甲状腺疾患を、ベーチェット病 87 例やサルコイドーシス 58 例や原田病 51 例ではそれぞれ 1 例に甲状腺機能亢進症をみるに過ぎなかったが、HAU では 50 例中 8 例(16.0%)とかなりの頻度で甲状腺機能亢進症を合併していた。

HTLV-I associated myelopathy を発症していた 2 例に共通してみられたぶどう膜炎所見は、豚脂様角膜裏面沈着と膜状の硝子体混濁であった。甲状腺機能亢進症を合併した HAU と合併しない HAU のぶどう膜炎所見に大きな差はなかった。

# IV 考 按

今回の調査では、採血に同意が得られた症例を対象としたことで、調査期間中に受診したすべての内因性ぶどう膜炎患者を対象とすることはできなかった。しかし、九州・沖縄地区および首都圏二地域で調査した内因性ぶどう膜炎は、約半数で疾患あるいは成因が明らかだったが、残りの半数は原因不明である点や、疾患が特定される場合は80%以上がベーチェット病、原田病およびサルコイドーシスが占める点では、地域差はほとんどなかった。血清抗 HTLV-I 抗体を測定すると、対照群に比べて「原因不明ぶどう膜炎群」の抗体陽性率は有意に高く、「既知ぶどう膜炎群」の陽性率は高くないという結果であった。この結果は、原因不明とされる事例の中には、HTLV-Iが関連するぶどう膜炎 HTLV-I associated uveitis (HAU) が存在するという従前の報告7181を支持する。

また、「原因不明ぶどう膜炎群」における HTLV-I 感染率は地域差が著しく、その地域の HTLV-I キャリアの頻度にほぼ比例していることが判明した。施設III(大分医大)で「原因不明ぶどう膜炎群」における HTLV-I 感染率が 0% であったのは、一般住民における感染率があまり高くないことと、調べた症例数が 20 例と少なかったことによると考えられる。施設IIIが症例数を少し増やして独自に検査した結果では、原因不明ぶどう膜炎 36 例中 2例(5.5%)が HTLV-I 陽性であった11)。すなわち、HTLV-I キャリアの多い地域では、HAU はかなりの頻度で存在するものと考えられる。一方、キャリアの少ない地域でも、キャリアの多い地域の出身者が HAU を発症することがあるのが注目される。

今のところ、HAU に特異的な臨床徴候あるいは検査 所見は明らかにされていない。既知のぶどう膜炎が除外 され、かつ、血液中の抗 HTLV-I 抗体が陽性の場合に HAU と診断している現状であるから、未知の原因によ るぶどう膜炎と HTLV-I 感染とが偶然に合併した症例 も含まれているに違いない。今回の調査対象にも、この ような事例が少なからず含まれていると考えられる. HAU の特徴的な臨床像が見出せないかと, HTLV-I 陽 性の「原因不明ぶどう膜炎群」を HAU と仮定して、そ の他のぶどう膜炎と比較したところ, 次のような結果が 得られた。HAUは、ベーチェット病や原田病とは異なる 臨床像を示す。サルコイドーシスとは、豚脂様角膜裏面 沈着物や虹彩結節や網膜血管炎など共通所見の多いこと が注目されるが、硝子体混濁の性状が雪玉状ではないこ と, 隅角結節や周辺虹彩前癒着が少ないこと, 片眼性罹 患が少なくないことなどが相違する。 さらに、血清アン ギオテンシン転換酵素に異常がないこと, 肺病変がない ことも重要な相違点である。HTLV-I 陰性の「原因不明 ぶどう膜炎群」(HTLV-I (-) 群) と比較すると、HAU では豚脂様角膜裏面沈着物が多く, 硝子体混濁が多く,

渗出性病変が少ないという傾向はあったが、HTLV-I (一) 群と識別するに足る大きな差異は見出せなかった。 HAU と仮定した症例群には HAU ではない症例を取り込んでいるであろうこと、HTLV-I(一) 群はさまざまな未知の原因による疾患の集まりとみなされることが、両群をそれぞれ一括して比較した場合に相違点を明らかにすることができない理由かも知れない。いずれにしても、HAU と仮定した多数例での今回の検索結果は、これまでの少数例の検討結果3068~10)を確認するものである。

HAU と仮定した 50 例の多くは,HTLV-I associated myelopathy を合併した 2 例を除いて,全身的には健康なキャリアの状態であった。しかし,かなりの頻度で甲状腺機能亢進症をみたことは注目に価する。すでに報告があるように $^{9)12}$ ,甲状腺疾患と HAU とは偶然の合併ではなく,HTLV-I 感染を共通の基盤として併発したものとみなしてよいだろう。

HAU の発症機序は、今のところ不明である。副腎皮質ステロイド薬への良好な反応性から、免疫的な機序が示唆される。この場合、HAUと仮定した症例群の血清HTLV-I 抗体価は、他のぶどう膜炎疾患群や対照群と比べ有意に高かったことが注目される。血清抗 HTLV-I 抗体価は、成人 T細胞白血病では低く、HTLV-I associated myelopathyでは顕著に高いことが指摘されている $^{13}$ 0. HAU 症例では、HTLV-I associated myelopathyにおけるほど顕著ではないが、HTLV-I に対する免疫反応が高まった状態になっているのかも知れない。

献血者の HTLV-I 感染率資料を提供して下さった福岡県赤十字血液センター所長前田義章先生にお礼申し上げます。この研究は、文部省科学研究費がん特別研究「HTLV-I 眼症の総合的研究」検討班(班長:大庭紀雄)、一般研究 B (03454417) および奨励研究 A (04771361) の補助を受けた。なお、本論文は、Japaness Journal of Ophthalmology に 2 篇の英文論文(A multicenter study of HTLV-I associated uveitis,Clinical features of HTLV-I associated uveitis revisited by a multicenter collaborative study)として発表した資料を要約するとともに、新しい資料をつけ加えて作成したものである。

#### 文 献

- Osame M, Janssen R, Kubota H, Nishitani H, Igata A, Nagataki S, et al: Nationwide survey of HTLV-I-associated myelopathy in Japan: association with blood transfusion. Ann Neurol 28: 50 —56, 1990.
- 2) Tajima K, The T- and B-cell Malignancy Study Group: The 4th nation-wide study of adult T-cell leukemia/lymphoma (ATL) in Japan: estimates of risk of ATL and its geographical and clinical features. Int J Cancer 45: 237—243, 1990.
- 3) Ohba N, Matsumoto M, Sameshima M, Kabayama Y, Nakao K, Unoki K, et al: Ocular manifestations in patients infected with human

- T-lymphotropic virus type 1. Jpn J Ophthalmol  $33:1-12,\,1989.$
- Nakao K, Ohba N, Matsumoto M: Noninfections anterior uveitis in patients infected with human T-lymphotropic virus type 1. Jpn J Ophthalmol 33: 472—481, 1989.
- 5) Sasaki K, Morooka I, Inomata H, Akamine T, Osame M: Retinal vasculitis in human Tlymphotropic virus type 1 associated myelopathy. Br J Ophthalmol 73: 812—815, 1989.
- 6) Hayasaka S, Takatori Y, Noda S, Setogawa T, Hayashi H: Retinal vasculitis in a mother and her son with human T-lymphptropic virus type 1 associated myelopathy. Br J Ophthalmol 75: 566 —567, 1991.
- Nakao K, Ohba N, Matsumoto M: Seroprevalence of antibodies to HTLV-I in patients with ocular disorders. Br J Ophthalmol 75: 76 —78, 1991.

- 8) Mochizuki M, Watanabe T, Yamaguchi K, Takatsuki K: HTLV-I uveitis: a distinct clinical entity caused by HTLV-I. Jpn J Cancer Res 83: 236—239, 1992.
- 9) Mochizuki M, Watanabe T, Yamaguchi K, Yoshimura K, Nakashima S, Shirao M, et al: Uveitis associated with human T-cell lymphotropic virus type I. Am J Ophthalmol 114: 123—129, 1992.
- Nakao K, Ohba N: Clinical features of HTLV-I associated uveitis. Br J Ophthalmol 77: 274—279, 1993
- 11) **小野ひろみ, 松尾健治, 藤島和香子, 中塚和夫**:大分 医科大眼科におけるブトウ膜炎と HTLV-I. 第63回 九州眼科学会抄録集:43, 1993.
- 12) **大庭紀雄, 中尾久美子**: レトロウイルス HTLV-I の 眼科臨床問題。日外会誌 94:433—440, 1993.
- 13) 納 光弘, 宇宿功市郎, 出雲周二, 井形昭弘, 太良光利, 松元 實:HTLV-I associated myelopathy (HAM) の病態機序. 神経内科 28:239-246,1988.